



衣川 良介

## 『播磨鍋前夜 播磨の鉄 点描』

奈良時代初期に編纂された（717年）、『播磨国風土記』に、讃容（さよ）の郡（佐用郡）にある鹿庭山（かにはやま）の谷で製鉄が行われており、難波の豊碇（とよさき）の朝廷（考徳朝：645～654年）に鉄を献上しました。同じく讃容郡（さよのこおり）の条に不思議な話が出てきます。

また隣の宍粟（しさを）郡（宍粟郡）の敷草（しきくさ）の里や御方（みかた）の里で製鉄が行われていたと記されています。

次に播磨の鉄が記載されているのは、大化の改新に始まった律令制の時代、10世紀の「延喜式」に『宮内省木工寮に鍛冶戸、兵部省兵庫寮に雑工戸』がみえ、『木工寮鍛冶戸に「播磨国十六烟」、兵庫寮雑工戸に「播磨国四烟」』がみえます。12世紀の記録に「播磨鑄師」が確認されますが、技術的には未成熟だったようです。（「長秋記」保延元年：1135）

鎌倉時代、秩父丹党に属する武士たちが、関東の秩父地方からこの地へ、地頭として移ってきました。秩父丹党は古代の豪族、丹治比氏の子孫といわれ、丹治姓を名乗りました。その彼らが遠く播磨国の西北部へ移ってきたのは、このあたりの山々が古くから鉄の産地であったことによると思われます。この地に移った丹治氏の一族は備前長船から刀匠を招いて、何度も刀を鍛えさせました。『宍粟郡三方西造之』（宍粟郡の三方西でこれをつくる）と刻まれた。鎌倉時代末期の正中2年（1325）に造られた刀が秩父神社に、その4年後嘉暦4年（1329）のものが広峰神社に奉納されました。

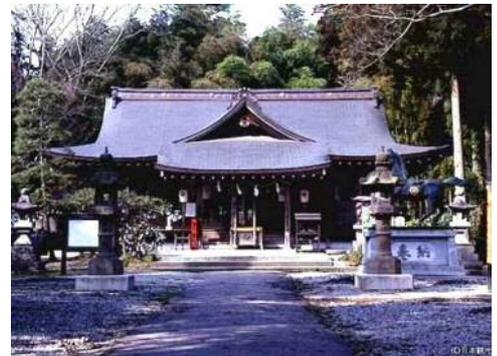
千種川沿いの上郡町は街道の中継点で京都・大坂へ、山陰へ、美作・新見へ、物流拠点でした。赤松則村（円心=1277～1350年）の出身地で上郡には『鍛冶千軒』の地名が残っています。ここでは鍛冶屋たちが鉄を製錬し、武器や農具を作っていたに違いありません。備前の刀匠たちは8里ほどの道を経て、ここへ足を運んだのです。時代は下りますが、嘉吉元年（1441）赤松満祐が六代將軍足利義教を暗殺するため、長船康光に播磨で三百腰作刀させる（『嘉吉記』）。

播磨の鉄の記事を点描しました。11世紀に成立した『新猿楽記』は能登の釜、河内の鍋を名産としています。播磨鍋の初登場は『七十一番職人歌合』（室町末期；1500年末ごろ）です。

### 鹿庭山



### 佐用都比賣神社



### 小野諏訪神社 日本刀のふる里



### 『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感



ホームページと電子メールをご利用ください。  
<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>  
[ryou@memenet.or.jp](mailto:ryou@memenet.or.jp)

#### 参考資料

『夢通信』	日本刀のふる里 小野	平成13年4月号 (2004)
『夢通信』	播磨国風土記 1 鹿庭山	平成29年4月号 (2017)
『夢通信』	播磨国風土記 2 不思議な剣	平成29年5月号 (2017)
『夢通信』	播磨国風土記 3 敷草村	平成29年6月号 (2017)
文化財だより75号	姫路市文化財保護協会	平成27年月1日 (2015)
日本刀のふるさと	小野諏訪神社 説明板	